

【論文】

「バイリンガル作家」としてのチンギス・アイトマトフ —ロシア語文中におけるキルギス語語彙の使用に関する一考察—

松下 聖

[*Резюме*]

Чингиз Айтматов как писатель-билингв
(Chingiz Aitmatov as a bilingual writer)

MATSUSHITA Sei

Чингиз Торекулович Айтматов - киргизский писатель, писавший на киргизском и русском языках. Ранние произведения написаны им по-киргизски, но начиная с «Прощай, Гульсары!» он писал только по-русски.

В этой статье нами рассмотрены причины «окончательного перехода на русский язык» писателя и проанализированы функции киргизской лексики в его русскоязычной повести «Ранние журавли». В результате, мы пришли к выводу, что после перехода на русский язык, писатель не бросил свой родной язык, а стал использовать средства киргизского языка в русской речи, чтобы создавать новый стиль между русским и киргизским языками, тем самым увеличивая народный колорит и эстетическую ценность произведений.

キーワード: アイトマトフ、キルギス語、ロシア語、バイリンガル作家、越境

はじめに

近年、「越境」をキーワードに文学が語られることが増えている¹。ここにおける「越境」の持つ意味は幅広い。狭義では亡命や移住といった空間的な越境を指すが、そればかりではなく、複数の言語・文化の経験の作品への反映や、既存のジェンダー、階級、ナショナリティといった観念からの脱出あるいは再定義の試みも文学における「越境」と言うことができるだろう。

中でも、複数の言語あるいは母語以外の言語で作品を執筆するバイリンガル作家は注目されることが多い。例えば、ロシア語・英語のバイリンガル作家、ウラジーミル・ナボコフ²や、かつて「外地」で日本文学の一角を担った作家たち（朝鮮生まれの日本語・朝鮮語作家の張赫宙³など）が「越境」という観点から再評価されている。現在も活躍する作家では、日本

語とドイツ語での執筆を続ける多和田葉子を始め、リービ英雄、楊逸など非母語である日本語で創作活動を展開する作家も注目を集めている。

このような言語と文学をめぐる議論は、80年代のソヴィエト連邦でも盛んになされた⁴。当時のソ連文学界では少数民族出身の作家が「民族作家」として数多く活躍し、中央文壇でも影響力を増していった。彼らの多くは母語ではないロシア語のみか、もしくは母語とロシア語の両方で作品を執筆した。チンギス・アイトマトフ（1928-2008, キルギス⁵）、ファジーリ・イスカンデル（1929-, アブハジア）、ワシーリ・フィコフ（1924-2003, ベラルーシ）、ユーリー・リトウヘウ（1930-2008, チュクチ）、ウラジーミル・サンギ（1935-, ニヴヒ）などである。中でも『一世紀より長い一日』（1980）や『処刑台』（1985）といった話題作を相次いで発表したアイトマトフは、初期作品はキルギス語で著し、後にロシア語のみでの執筆に移行したことや、母語ではないロシア語の文体がたびたび俎上に上げられ、論じられた。

本論文は、このアイトマトフの生涯と作品を手掛かりに、作家の没後二年を経た現在から「バイリンガル作家」としてのアイトマトフを問い直し、「越境文学」という今日的な問題の考察へ繋げることが目的である。

まず1.では、アイトマトフが執筆に使った言語の変遷とその背景について論じる。アイトマトフは、本格的な作家活動の始まりとなる『セイデの嘆き』（1957）から1960年代前半までの作品は、基本的にキルギス語で執筆していたが、1966年の『さらば、グリサルィ！』を境に全てロシア語で執筆するようになった。そのように二言語での執筆を可能にした背景と、ロシア語へ移行した要因について述べる。2.では、ロシア語へ移行してからのアイトマトフの作品中で使用されているキルギス語語彙の機能と用法について考察する。アイトマトフはロシア語で執筆するようになって、決してキルギス語を「捨てた」わけではなく、むしろロシア語の中で母語の「資産」を積極的に活用するようになった。その例を『早春の鶴』（1975）から取り上げて分析する。

1. 「バイリンガル作家」アイトマトフの生涯と言語

1.1. 主な作品と執筆言語の変遷

(表1) アイトマトフの主な作品と執筆言語一覧

発表年	作品名	執筆言語	備考
1957	セイデの嘆き «Лицом к лицу»	キルギス語	ロシア語訳(1958年): ドローゾフ
1958	ジャミーリャ «Джамиля»	キルギス語	ロシア語訳: ドミートリエヴァ
1961	愛しのタパリョーク «Тополек мой в красной косынке»	キルギス語 (1963年)	ロシア語訳: アイトマトフ
1961	らくだの瞳 «Верблюжий глаз»	キルギス語 (1962年)	ロシア語訳: ドミートリエヴァ
1961	最初の教師 «Первый учитель»	キルギス語	ロシア語訳(1962年): アイトマトフとドミートリエヴァの共訳
1962	母なる大地 «Матерское поле»	キルギス語	ロシア語訳(1963年): アイトマトフ
1966	さらば、グリサルィ! «Прощай, Гультары!»	ロシア語	
1970	白い汽船 «Белый пароход»	ロシア語	

「バイリンガル作家」としてのチンギス・アイトマトフ（松下聖）

1975	早春の鶴 «Ранние журавли»	ロシア語	
1977	海際を駆ける斑犬 «Пегий пес, бегущий краем моря»	ロシア語	本作までは全て中編小説
1980	一世紀より長い一日 «Идальше века длится день»	ロシア語	長編
1986	処刑台 «Плаха»	ロシア語	長編
1990	セイデの嘆き（加筆改稿版） «Лицом к лицу»	ロシア語	1958年版の翻訳テキストにアイトマトフが新章を加筆
1990	チンギス・ハンの白い雲 «Белое облако Чингизхана»	ロシア語	中編
1996	カッサンドラの烙印 «Тавро Кассандры»	ロシア語	長編
2006	キルギスの雪豹—永遠の花嫁 «Когда подают горы»	ロシア語	長編

*キルギス語版とロシア語訳版で発表年が異なる場合、発表が遅い方の年号を括弧内に記した。

（表1）は、アイトマトフの主な作品と執筆に使った言語を年代順にまとめたものである。これを見ると、『セイデの嘆き』（1957）から『母なる大地』（1962）までは、オリジナルは全てキルギス語で執筆し、ロシア語訳を翻訳家に任せる（『セイデの嘆き』『ジャミーリャ』か、作家自身が共訳（『最初の教師』）もしくは完全な自己翻訳（『愛しのタパリョーク』『母なる大地』）を行っていたことが分かる。しかし『さらば、グリサルィ！』（1966年）からは、全てははじめからロシア語で執筆している⁶。このようにロシア語での執筆に移行した背景については1.3.で検討するとして、アイトマトフはなぜキルギス語でもロシア語でも創作できる言語能力があったのか、まずはその点を確認する。

1.2. アイトマトフの言語能力

いくらソヴィエト時代にロシア語が「民族間交流語」として活発に用いられていたからといって、文学作品を書くほどに高度な言語能力を習得するのは、ネイティブにとっても容易いことではない。それを、キルギスの農村出身のアイトマトフはどのように身に付けたのだろうか。

その第一の理由に、幼いころからバイリンガル教育を受けていたことが挙げられる。父トレクル、母ナギマは共にインテリで、当時としては珍しく読み書き能力があった。そして幼少の頃から息子チンギスにロシア文化、ロシア語、ロシア文学に親しませた。両親と離れて祖母の村にいた5歳の時には、ロシア語ができない村人に代わって通訳もどきのことをしたという⁷。その後、ロシア語学校へ通うなどし、14歳の時には語学力を買われ村ソヴィエトの秘書となった。フルンゼ（現ビシュケク）の農業大学を卒業後、畜産技師として働く傍ら創作を始めるが、キルギス語による作品と同時に『新聞記者のジョー』«Газетчик Дзюйо»（1952）や『アシム』«Ашим»（1954）といったロシア語作品も発表している。このように生活・学習の言語として早くからロシア語を習得していたのに加え、当初から創作の言語としても用いていたことが伺える。自身が1982年のある対談で「ロシア語で書く時、どのように感

じているのか」との問いに「私にとってロシア語は、キルギス語に負けず劣らず母語 (родной: ラドノイ) である。子どもの頃からラドノイ。人生を通してラドノイである」⁸と答えたように、作家にとってロシア語はキルギス語と同様に限りなく「母語」であったのだ。

次に、逆説的ではあるが「なぜキルギス語でも書けたのか」という問いも必要である。キルギス民族はもともと遊牧民であり、20世紀初頭までほとんどの人は文字を知らなかった。それがロシア革命以降、教育制度の普及と共にキルギス語と人々は文字を獲得した⁹。その後、キルギス初の新聞『エルキン・トー』«Эркин-Тоо»¹⁰が発行されるなど言論の場が形成されつつあった1920年代が「キルギス文学」の黎明期であった。

このあまりにも「若い」文学が、アイトマートフが創作を始めた1950年代までに、果たして現代文学を扱えるほど発展し得たのだろうか。キルギス語にはもともと口承文芸の豊かな伝統があり、それをそのまま文字に置き換えるといったことは盛んに行われていたようである。それに加えてロシア文学の翻訳、あるいはロシア語を通じた世界文学の翻訳によって、キルギス語の表現は急速に拡大していった。そして、カスィム・トィヌスタノフ¹¹、ウザクバイ・アブドゥカイモフ¹²といった先達の活躍によりキルギス語文学の礎が醸成されていった。

アイトマートフのキルギス語による文学的実践の始まりも、やはりロシア文学からの翻訳であった。回想によると、農業大学時代にミハイル・ブベンノフ (Михаил Бубеннов) 『白樺』«Белая береза」とヴァレンチン・カタエフ (Валентин Катаев) 『連隊の子』«Сын полка» (いずれも1940年代に刊行) のキルギス語訳を試みている。結局この二作はすでに翻訳されており出版されなかったが、「これがまさに私の文学の始まりであった」¹³という。それ以後、『白い雨』«Ак жаан» (1954) などキルギス語の短編小説を発表するようになった。

このように、アイトマートフはかなり初期の段階から既にロシア語とキルギス語の二言語による創作が志向され、実践されていたといえる。アイトマートフのロシア語については「彼 (アイトマートフ) の作品の言語的な美的価値そのものはロシア人作家の言語に劣っている」¹⁴と批判する者もあれば、「少なくとも、19世紀ロシア文学や他の (ソヴィエト期も含む) 現代ロシア文学と同様に、アイトマートフ作品 (ロシア語) を読んでも、何ら違和感を感じない」とし、アイトマートフのロシア語に対する批判へは「スタイル (文体) の違いによるのではないか」という見解も示されている¹⁵。このように評価の分かれるところであるが、アイトマートフが受賞した数々の賞や読者の支持を見れば、アイトマートフのロシア語はロシア文学の伝統に受け入れられているとすることができるだろう。ロシア語とキルギス語は、アイトマートフにとってはどちらも「利き腕」だったのである。

1.3. ロシア語への移行

次に、アイトマートフが1960年代後半以降、ロシア語での執筆に移行した背景について考える。

前述のように当初から二言語併用創作を志向する素地はあったのだが、初期作品の多くはキルギス語で書き著している。初期の創作にロシア語ではなくキルギス語を選んだ理由について明確な発言は見られなかったが、一つ言えるのは、この段階ではキルギス語での執筆

が作品評価においてマイナスに働くことはなかったということである。アイトマトフは1958年、キルギス語で発表した『ジャミーリャ』でソ連内外から高い評価を受けた。レーニン賞を受賞した『山と草原の物語』に収録されている作品も、全てオリジナルはキルギス語である。このように、翻訳（自己翻訳も含む）を通して広い読者を獲得することは十分可能だったのである。

しかもアイトマトフは繰り返し母語の重要性を述べている。例えば1967年の「アジア・アフリカ作家同盟会議」では「偉大な文学的伝統を持つ高度に発展した言語に完全に切り替え、母語での表現に頭を悩ますことなくその言語のみで創作するのが何よりも楽。そして、このような言語選択の自由は誘惑的ではある。しかし、ある言語の文学に委縮を引き起こすこういった方法では民族言語が発展できるのか？このようなやり方で、民族文化の発展は実現するのか？」¹⁶と発言するなど、既に偉大な伝統を持つロシア語の「完全な扶養」に入るよりは「共存の道、つまり先進的な言語を使用しつつ民族言語も同時に発展させていく道」¹⁷を選ぶべきだと主張している。

しかし、結局のところ、1966年『さらば、グリサルィ！』以降の主な作品は全てロシア語で発表している。この一見矛盾するかのような「最終的なロシア語への移行」の裏には一体どんな要因があるのだろうか。

キルギス人のアイトマトフがなぜロシア語で書くのか—この点については、多くの論考が示されている。中でもアイトマトフのロシア語への移行について、ロシア語の優位性とキルギス語の問題点などを挙げてかなり詳細な分析を加えているのがアプィシェフ『バイリンガル現象：チンギス・アイトマトフとマル・バイジェーフ』（2009）である。この著作の中で強調されているのは、ロシア語の読者空間の広さとその「質」である。ロシア語読者の量的な規模に加え、作家として成長するためには、正当な評価を受けられる「高度に教育され、準備された読者と文学空間の存在」が何よりも必要だったという。60年代までの「フォークロアの伝統が優勢で、世界文学からの翻訳の質もまだ不十分」であったキルギス文学界では、アイトマトフの望むハイレベルな読者や批評家を得るのは容易では無く、キルギス語で書いていた「習作」の期間を終えてロシア語の文学空間と一体となるのは当然のことであった。そのようにアプィシェフは結論付けている¹⁸。

この他に作品テーマやジャンルの変遷もロシア語で書いた動機として重要だろう。

アイトマトフ作品は、自身が1980年の対談で「私はすでに60年代始めのように書けない。作家として新たな地平に向かわなければならない」¹⁹と述べているように、テーマやジャンル、作品形態などの点で大きく変わっていった。1960年代前半までは、中央アジアの農村に暮らす人々が直面する苦悩や葛藤をリアリズム的に描いた作品がほとんどだったが、老人と老いた愛馬とのエピソードを抒情的に描くと共に、かつての富農追放や党活動などイデオロギーにも踏み込んだ『さらば、グリサルィ！』、ニヴヒ族の伝承を元に描いた『海際を走る斑犬』、初の長編でSF的モチーフを取り入れ、古代から未来まで複数の時間層を絡ませた『一世紀より長い一日』、麻薬問題と異端思想、神学を扱った『処刑台』など、ロシア語での執筆に移行した1960年代後半から、作家の思想・文学的な深化は一気に速まったと言えるだろう。

このように、読者空間の広さに加え、作品自体も普遍性を兼ね備えた「広い世界」²⁰に繋がらなかった。そうした作家としての思い—ロシア語への欲望²¹—がアイトマートフをロシア語での創作に突き動かしたとすることができるのではないだろうか。

2. ロシア語の中で生きるキルギス語語彙

2.1. 語彙分析の手法

しかし、ロシア語での執筆へ移行したとしても、キルギス語を「捨てた」わけではなかった。むしろロシア語作品中でキルギス語またはチュルク系言語²²の「資産」を積極的に活用することで、民族的な情景をより鮮やかに描くことが可能になっているのだ。「キルギス語の資産」とは、広い意味で考えれば神話、伝承、ことわざ、慣用句、語彙などがあり、アイトマートフ作品について論じる際には欠かせない要素となっている。

中でも、アイトマートフ作品に用いられているキルギス語（またはチュルク系言語）の語彙についてはたびたび言及されているが、用例をいくつか引いて解説しているものがほとんどで、一つ（あるいは複数）の作品の使用語彙について網羅的に分析した研究は数少ない²³。そこで筆者は独自に、アイトマートフの三作品『セイデの嘆き』『愛しのタパリョーク』『早春の鶴』の中で用いられているキルギス語語彙を全て抽出²⁴し、周囲の文脈や品詞、脚注の有無、出典箇所などの情報を付加した簡易コンコーダンス²⁵を作成して、語彙の機能や用法の検証を目的とした研究を試みた。本論では、この成果から『早春の鶴』を取り上げ、1つの分析事例として示したい。なお、紙面の都合上この簡易コンコーダンスは掲載できないため、代わりに語彙一覧（表2）を文末に付した。

2.2. 『早春の鶴』について

今回題材とする『早春の鶴』のあらすじは以下の通りである。

ドイツとの戦争が激しさを増し、次々と村の男たちが徴兵されていた頃、コルホーズ議長が学校にやってきて、生徒らに村から遠く離れたアクサイに耕作へ行くよう求めた。スルタンムラートは求めに応じた生徒の一人である。彼は「前衛部隊」の隊長に命じられ、他の3人を率いて耕作用の馬を準備し、アクサイへ行くことになった。馬の世話のため学校へ行けなくなると、クラスメイトのミルザグリを想う気持ちが日に日に強くなり、彼は生れて初めて恋文を書いた。彼はまた前線へ送られた父のことも想っていた。しばらく父からの便りは無く、母をはじめ家族の不安は募るばかりだった。そんな中、ミルザグリへの恋は叶い、彼女の気持ちを知ることができたスルタンムラートは幸せの気分浸っていたが、アクサイへの出発直前に「前衛部隊」の隊員であり恋敵でもあったアナタイの父の戦死の報を聞き、自らの父への不安も襲ってきた。

そんな気持ちを抱きながらアクサイへと出発し無事耕作を始めることができたが、ある夜馬泥棒が侵入してきて、丹精込めて育てた馬を盗まれてしまう。スルタンムラートは父親の駿馬に乗り盗人を追いかけた。追い上げられた盗人たちは、ライフル銃をスルタンムラートの方へ向けた。彼の乗る馬は撃ち殺され、盗人たちはやすやすと逃げていった。

2.3. 量的考察

「アイトマトフ作品のどのページでも、キルギス語（あるいはテュルク系の語）に出会うことができる」²⁶とまで言われることもあるが、実際にはどれくらいの頻度でキルギス語の語彙が使われているのだろうか。

電子データ²⁷を利用して『早春の鶴』の総語数（同じ単語であっても重複して数え上げている）を調べると約 28,500 語となった。そのうち、キルギス語の語彙（挿入詩を除く）は 29 種類が計 120 回用いられていた。この頻度が高いのか低いのかの客観的判断は難しいが、「キルギス語語彙を頻繁に用いるのがアイトマトフ文体の特徴」とは言い切れないのではないだろうか。その理由として、アイトマトフ作品で翻訳家がロシア語訳をした部分とアイトマトフ自身の加筆部分が混在している『セイデの嘆き』では、7:3 の比率で（つまり 2 倍強）ドローゾフ訳の方が頻繁にキルギス語語彙を用いていたことが挙げられる。場面の違いもあるだろうが、翻訳者が地域色を出そうとキルギス語語彙を多用しているのに対し、アイトマトフはむしろ抑制的に、特定のキルギス語語彙を用いていたと推測することもできる。キルギス語語彙の使用は、その量や頻度よりはその使われ方や語義の傾向に注目すべきだろう。

2.4. 語義の解説と欄外脚注の活用

本作の中には、аил（村、キルギスの行政区画）、арык（灌漑）のように既に借用語としてロシア語に定着した語も多用されているが、半数以上はロシア語母語話者、あるいはテュルク系言語の母語話者以外にとっては見慣れない単語だと思われる。そのような語彙は、欄外脚注で解説するか、本文中でロシア語の同義語が繰り返され、意味が汲み取れるようになっている。

欄外脚注ではロシア語の同義語に置き換えるのみの場合が多いが、語形成や出典まで説明する場合もある。後者の例を見てみよう（以下、引用中の下線は筆者による）。

- Ну что уставились! - заворчал старый Чекиш. - Думали, вам здесь Манасовых тулпаров* на расчалках будут удерживать?

(脚注) *Манасовый тулпар: легендарные скакуны из войска Манаса, героя народного эпоса «Манас».

ここは、アクサイという遠い耕作地へ行くことになった子供たちにまず馬を育てるという課題が与えられ、長老チェキシにより馬と対面させられた場面である。ところがそこにいた馬はみな皮と骨だけの痩せ馬で、チェキシ老人は「マナスの駿馬につっかえ棒をやらねば」と自虐的に嘆いていたのである。「Манасовый тулпар」には「マナスのトゥルパル：民族の叙事詩『マナス』の英雄マナスの軍隊から来た伝説上の駿馬」という脚注が付されており、チェキシ老人の皮肉をより鮮明にしている。

一方、本文中での繰り返しは『早春の鶴』では джана（接続詞〜と）の 1 例しか見られなかったが、脚注を用いずに読者には見慣れない語を使う、効果的な方法である。読者の視線

を脚注に逸らしてリズムを妨げることなく、新出の語彙を使うことができるのである。

...а в одном углу были обозначены красными нитками две большие и одна маленькая буквы среди узоров: "S.c.M.", что означало "Султанмурат джана Мырзагуль" - «Султанмурат и Мырзагуль».

以上のような欄外脚注や繰り返しの活用によって、単に翻訳として語義を伝えるのみならず、キルギス語語彙を文脈の形成やエピソードに深く関わらせることもできるのである。このことから、作者がキルギス語語彙を戦略的・意図的に使用していることがわかる。

2.5. 語彙の傾向

作中に使われているキルギス語語彙一覧を見ると、中央アジアの生活や自然を指し示す具体的な名詞がほとんどなのが分る。例えば бозокер (ボゾ売り), дувал (垣根), тайке (母方の伯父), ширалга (獲物の一部), шурпа (肉のスープ) などは中央アジア特有の語彙で、ロシア語に同義語は存在するとしても意味が完全に一致しない、あるいは数単語を組み合わせてしか表現できない語彙である。Тайке (母方の伯父)、агай (兄) の場合は、ロシア語の親族名称の体系とは異なるキルギスのシステム (母方と父方の伯父を区別する、年上・年下の兄弟を区別する) が言語の上で示される。こういったキルギス語特有の語彙の使用は、民族生活や中央アジアの自然をより具体的に描き出して、民族的・地域的な差異・独自性を示すのに効果的だろう。

一方で、ロシア語に語義がほぼ完全に一致する「等価語」が存在するのにキルギス語が選択されている場合がある。例えば ата (父) という単語は『早春の鶴』に限らず毎作のように登場するが、同じ作品でも登場人物によって папа と使い分けられている。そうした語彙選択の裏には著者の狙いが隠れている可能性が極めて高いので、文脈を丁寧に観察する必要があるだろう。次に紹介するのは、ロシア語に等価語があるにも関わらずキルギス語語彙が使われている好例である。

2.6. 異化、そして「民族の物語」へ

本作では、物語の大きな軸でもある主人公スルタンムラートとミルザグリの初々しい恋のエピソードの要所にキルギス語語彙が登場している。しかも前述のように、語義の上で全く等しい語がロシア語に存在するにもかかわらず、敢えてキルギス語語彙が用いられている。まずは物語冒頭に、次のような描写がある。

Не гоняться же за ней. Совсем засмеют. Эти девчонки всегда горазды придумывать что-нибудь. Сразу пойдут записочки: "Султанмурат + Мырзагуль = эки ашык". А так сидели бы рядышком - и ничего не скажешь...

ここは、スルタンムラートが同じクラスのミルザグリに何か話しかけると、すぐから

かわれ「スルタンムラート+ミルザグリ=二人の恋人 «эки ашык»」などと書かれたりするのだろう、と考え、彼は彼女に何も言わない、という場面である。この時点では、スルタンムラートは確かにミルザグリを意識してはいるが、それが恋心だとは気付いていない。

しかしその後、人出不足からコルホーズに徴用され、遠く離れたアクサイに行くことが決まると、彼女に対する恋慕の情に気が付き始め、やがて恋文 «ашыктык кат» を書くことを決意する。

Наконец он решился. Озаглавив свое письмо "Ашыктык кат", написал, что оно предназначено живущей в аиле прекрасной М., свет красоты которой может заменить свет лампы в доме.

意を決したスルタンムラートはミルザグリに恋文を出したが、なかなか返事が来ず、気が揉む。しかしある日、二人は小川のほとりで、まるでお互いに待ち構えていたかのように出会うことができた。そしてミルザグリからは、二人のイニシャルをあしらったハンカチが手渡された。それからスルタンムラートは、ポケットからそのハンカチを取り出して眺めては、幸せな気分浸るのだった。その場面でもキルギス語の接続詞 джана が用いられている。

...а в одном углу были обозначены красными нитками две большие и одна маленькая буквы среди узоров: "S.c.M.", что означало "Султанмурат джана Мырзагуль" - «Султанмурат и Мырзагуль».

この一連のエピソードにキルギス語の語彙が使われた理由は2点あると筆者は考える。

1点めは、文体に緊張感を与えるという創作技法のためである。ロシア語でも表現できる内容をキルギス語に置き換えることによって通常の規範から離れ、読者の印象が強くなる。すなわち「異化」を生じさせるのである。それにより、スルタンムラートの初恋の始まりからささやかな成就までのエピソードが効果的な繋がりを見せている。

2点めは、主人公スルタンムラートとミルザグリの恋を「民族の物語」としてより美しく描くためである。本作には全編を通して、キルギスの叙事詩『マナス』になぞらえた描写が頻出している。2.4. で引用した場面の他には、「彼（コルホーズ議長）は子供たちの前に、自身がマナスであるかのように立ちはだかった」とか、「彼女（ミルザグリ）を愛しているんでしょ？（マナスに登場する）アイチュレックとセメテイのように」とスルタンムラートの弟が兄をはやし立てる、といった場面もある。物語の背景には『マナス』があり、スルタンムラートとミルザグリとの恋物語は現代のひとつのエピソードとして完結せずに、古代からキルギス民族の間で脈々と受け継がれてきたこの叙事詩に通じているのである。そう考えた時に、果たしてロシア語の語彙のみでこの「民族の物語」を描けたか、脈々と受け継がれた民族の伝承と融合した普遍的、純粋な愛の物語を美しく描けたか、と疑問に思わずにはいられない。この場面でのキルギス語語彙の使用は、文学的な効果を生み出すと共に、作

品を「民族の物語」にまで発展させるためには、まさに必然だったのではないだろうか。

3. 結論

以上、1. では執筆言語の変遷とその背景をたどるといふ作家論の観点から、そして2. ではロシア語作品中でキルギス語の語彙がいかにか用いられているかという言語の面から、バイリンガル作家アイトマートフの実像に迫った。

この一連の作業から見てきたことは、文学作品と言語、作家の三者は相互に影響し合い、決して一方的な使役の関係にはならない、ということである。筆者は、バイリンガル作家の存在をにべもなく否定したジュソイティ²⁸には賛成しかねるが、彼の「作家が言語を操っているのみではなく、言語も作家を『操って』いるのだ」²⁹という言葉自体には賛同できる。言語を操って文学作品を生み出すのは作家であるから、一見して作家が言語に対して優位であるように感じるが、特に母語の存在は作家を、そして文学作品を否応なく束縛する。それは決してネガティブな事ではなく、創作言語を洗練させ、文学空間を形成する不文律でもある（これが無ければトルストイもトゥルゲーネフもフランス語での創作に「移行」してしまったかもしれない）。しかし一方で「越境する文学」があり、バイリンガル作家たちがいる。言語と作家の間に横たわる不文律を犯す彼らは「作家ではないか、または文学者くずれの才気ある商売人」³⁰なのだろうか。当然、そうではない。一言語と作家の蜜月関係を打ち捨てた多言語間の緊張関係の上にしか築けない文学世界も存在するわけで、そういった作品が文学に新たな可能性を与えてくれると信じる者は少なくないだろう。

アイトマートフはその点、かなり意識的な作家であったと言える。彼自身「私はもし最初にキルギス語で本を書いたらロシア語へ訳す。その逆も然り。こうすることで、この双方向の作業から私は深い満足を得ることができる。これは文体の改良や言語イメージを豊かにする、作家にとっては非常に面白い内部作業だ」³¹と述べ、二言語併用のメリットとしている。また2. で見たように、はじめからロシア語で書いた作品であっても意識的にキルギス語の要素を取り込むことで、新たな文体の可能性と、民族的な情景をロシア語ロシア文学の世界に持ち込むことができたのである。そうしたアイトマートフの創作活動は、単に新たな文体を生み出したい、民族的なモチーフを用いながら普遍的なテーマに挑みたいという文学的な欲望のみではなく、自民族（キルギス民族、チュルク系民族）の歴史、文化、言語への愛着や敬意を、いかに自らがキルギス語と同時に受容してきたロシア語・ロシア文学と融合できるかという、「越境作家」アイトマートフの言語・文化的アイデンティティーの表れでもあったのではないだろうか。

今年（2011年）でソ連崩壊から20年となる。ナボコフやプロツキーといった亡命作家の研究や再評価は進められている一方で、ソ連時代から活躍していた当時の「民族作家」たちは過去の作家として（少なくとも日本では）ほとんど注意を払われなくなってしまっている感がある。それでも、故郷のキルギスや中央アジアで今も根強い人気を誇るアイトマートフのように、後世に多大な影響を与えた作家や作品が存在するのは確かである。今後、そういった作家や作品について、ロシア文学史における位置づけや崩壊後の各国文学形成に果たした役割、作品の普遍性の評価などはなされていくであろうし、なされるべきである。そういっ

た時に、本論でも繰り返し述べた、文学と言語をめぐる「越境」という観点は、極めて重要な視座を提供し得るだろう。

(表2) 『早春の鶴』キルギス語彙一覧

No.	語彙	語義			
1	агай	兄	16	камча	鞭
2	аил	村	17	курай	アシの一種
3	аксакал	長老	18	курджун	馬の荷袋
4	арабакеч	御者	19	сайгак	サイガク
5	архар	野生の羊	20	сарайгыры	ホオジロ
6	арык	灌漑	21	суюнчу	吉報
7	ага, агаке	父	22	тайке	母方の伯父
8	ашыктык кат	恋文	23	торайгыр	栗毛の雄馬
9	батыр	勇士	24	тулпар	競走馬
10	бийкеч	お嬢さん	25	устаке	職人
11	бозокер	ボゾ売り	26	чайхана	喫茶
12	джана	〜と	27	ширалга	獲物の一部
13	джигит	若い男	28	шурпа	肉のスープ
14	дувал	垣根	29	эки ашык	二人の恋人
15	жаман	悪い			

註

- 1 研究書では、土屋勝彦編(2009)『越境する文学』水声者、沼野充義(2002)『徹夜の塊 亡命文学論』作品社など。作家によるエッセイや対談には、リービ英雄(2007)『越境の声』岩波書店、多和田葉子(2003)『エクソフォニー』岩波書店など。
- 2 最近のナボコフ研究の成果には、ロシア語と英語両言語のテキストを緻密に分析した秋草俊一郎(2011)『ナボコフ 訳すのは「私」』東京大学出版会がある。
- 3 張赫宙(1905 - 1997) 日本統治下の朝鮮出身で、初めて日本の中央文壇で活躍した朝鮮人作家。張赫宙(2003)『日本語作品選』勉誠出版(巻末に南富鎮『日本語への欲望と近代への方向』収録)
- 4 代表的な論者はグセイノフ(Гусейнов Ч.)。自身もアゼルバイジャン語とロシア語のバイリンガル作家である。文学とバイリンガリズムを扱った著作に、Этот живой феномен. Советский писатель, 1988, О двуязычном художественном творчестве//Вопросы литературы, 1987. №9. С.79-112 などがある。
- 5 キルギス民族はキルギス共和国の主要民族である。同国の人口約560万人のうち、キルギス系は64.9%を占める(外務省ホームページより)。国名等に用いられる「キルギス」は、キルギス語の発音に合わせてクルグズ(Кыргыз)と表記される場合もあるが、本論ではより一般的な表記である「キルギス」に統一する。なお、キルギス人の中では、キルギス(Киргиз)は「キルギス語を話さない(話せない)キルギス人」という意味で使われることもある。
- 6 出版時の言語がロシア語であっても、創作の過程で二言語間を「往来」していた可能性は否定できない。例えば『さらば、グリサルィ!』はもともと革命40年コンクールのためにキル

- ギス語で書かれた作品（落選）がベースになっていると明かされている。*Апышев М.* Феномен двуязычия: Чингиз Айтматов и Мар Байджиев, Бишкек, Научно-популярное издание, 2009, С.62
- 7 *Айтматов Ч.Т.* Рассказы, Очерки, Публицистика. М. Молодая гвардия, 1984, С.109
- 8 Там же. С.159
- 9 1920年代は改良アラビア文字、1920年代後半からはラテン文字、1940年代になるとロシア語普及の目的と合わせてキリル文字が導入された。
- 10 «Эркин-Тоо»は『自由な山』を意味する。1924年に創刊された。1927年、「Кызыл Кыргызстан」『赤いキルギスタン』と改名される。ソ連崩壊後は「Кыргыз Туусу」の名で発行が続けられている。
- 11 Касым Тыныстанов(1901-1938) キルギスの言語学者、詩人。ラテン文字時代のキルギス語正書法制定に大きく貢献したが、民族主義のかどで粛清される。
- 12 Узакбай Абдукаимов(1909-1963) 小説家、翻訳家として活躍。プーシキンやゴーゴリのキルギス語訳を多数行った。
- 13 Там же. С. 115
- 14 *Джусойты Н.Г.* Что это такое-родной язык писателя?//Вопросы литературы, 1988, №7, С.56
- 15 阿部昇吉(1998)『脱走』のロシア文学——アイトマトフの小説「セイデの嘆き」をめぐって——』創価大学外国語学部紀要 1998年第8号, 167
- 16 *Айтматов.* Рассказы. С. 350
- 17 Там же. С.347
- 18 *Апышев.* Феномен двуязычия. С.71-73
- 19 *Айтматов.* Рассказы. С.274
- 20 1988年にアイトマトフが来日した時、ロシア・ポーランド文学研究者の沼野充義氏は「どうしてロシア語だけで書くようになったのか」と作家に問うたという。その回答は「ロシア語のほうがより広い世界に通ずるから」というものだったそう。沼野(2002), p.284
- 21 張赫宙に関する南の論考(註3)で、朝鮮出身の張が日本語で作品を書き続けた根幹には、朝鮮語では書き表せない「近代的な言語の磁場(コンテクスト)」の上に立って表現したいという「日本語への欲望」があったと指摘している。時代と地域は大きく違うとはいえ、「帝国」の言語に傾倒して、その言語で作品に近代性や普遍性を与えようとした点など、張とアイトマトフの立場には共通する部分があるのではないか。
- 22 キルギス語はテュルク系の言語である。ここで取り上げる「キルギス語」の中には、キルギス語固有の語彙のみでなく、テュルク系言語で広く用いられている語彙も含む。また、カザフが舞台となっている『一世紀より長い一日』においては、同じくテュルク系言語でキルギス語と近い関係にあるカザフ語の語彙が豊かに使われている。
- 23 先行研究には、『一世紀より長い一日』におけるカザフ語語彙について分析した論文がある。脚注の用法から固有名詞の機能、動物の象徴性まで、体系立った論考が示されている。*Иванова В.А.* и *Купина Н.А.* Лексическое взаимодействие русского и казахского языков//Культура русской речи в условиях национально-русского двуязычия(под ред. Михайловская Н. Г.), 1985. С138-148
- 24 キルギス語語彙として抽出するかどうかは Кыргызско-русский словарь(под ред. Юдахин К.К.), М., Советская энциклопедия, 1965における記載の有無で判断する。また、作品中で多用される固有名詞の存在も、作品の民族色を強める要素として無視できない。民族特有の名称から抱く漠然としたイメージのみではなく、例えば『早春の鶴』に登場する女性の名前の多くが不変化である(Инкамал-апай, Мырзагуль, Алмагай)ことで文法的にも「非ロシア性」を印象付けるといふ働きも指摘できる。固有名詞も語彙の範疇であるので、この点は稿を改めて詳細に検討し

たい。

25 コンコーダンスとは「ある特定の書物の中に用いられている語、または特定作家の用いた語をアルファベット順に配列し、その語を含む章句と出典箇所を示した辞書」である（田中春美編（1988）『現代言語学辞典』成美堂）。一般的には特定の書物内で（あるいは特定作家により）用いられている語全てを一覧にする。今回は特定の語彙しか抽出しないため簡易的コンコーダンスとした。

26 *Воронов Вл.* Чингиз Айтматов: очерк творчества. М. Советский писатель, 1976. С.229

27 <http://lib.ru/PROZA/AJTMATOW/zhuravli.txt> (出典： *Айтматов Ч.Т.* Ранние журавли. М. Молодая гвардия, 1978)

28 「私は母語でない言語で書く作家などいないと確信している。同時に、非母語で書く作家はおおよそ作家ではないか、もしくは文学者くずれの才気ある商売人だと思う」 *Джусойты*. Что это такое. С.37

29 Там же. С.52

30 註 28 参照

31 *Айтматов*. Рассказы. С.348

